

特42

953

實說
双紙

義經一代記



091533-000-5

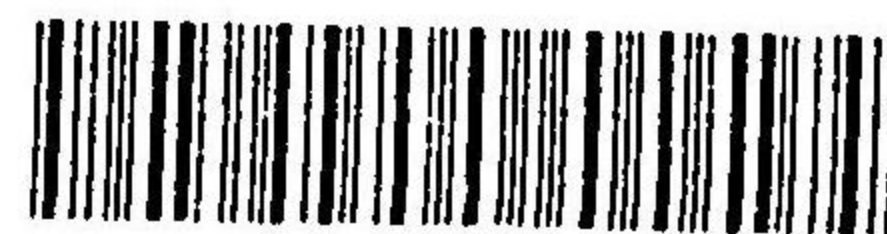
特42-953

義經一代記

隅田園 古雄/編

M18

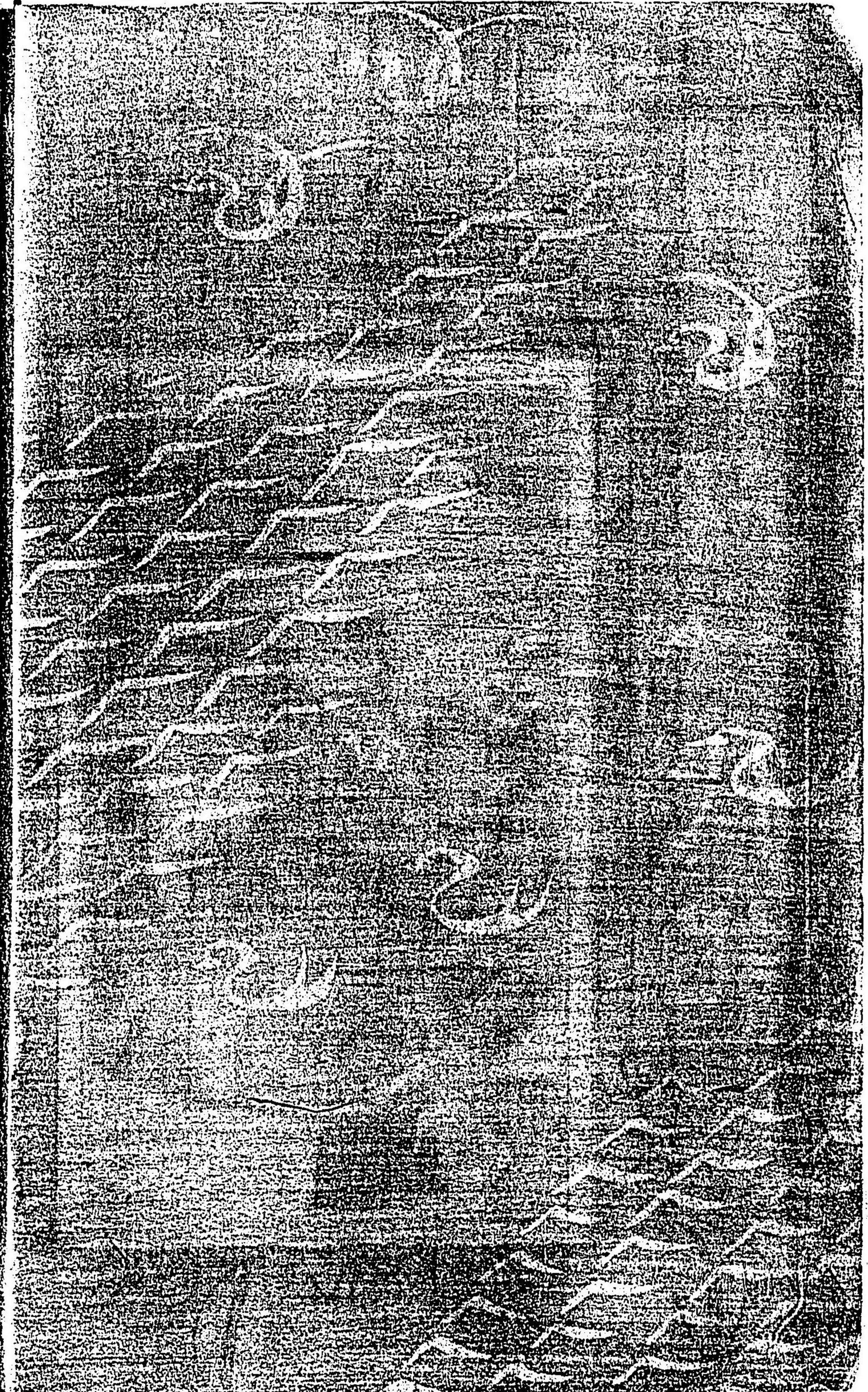
DBN-2522



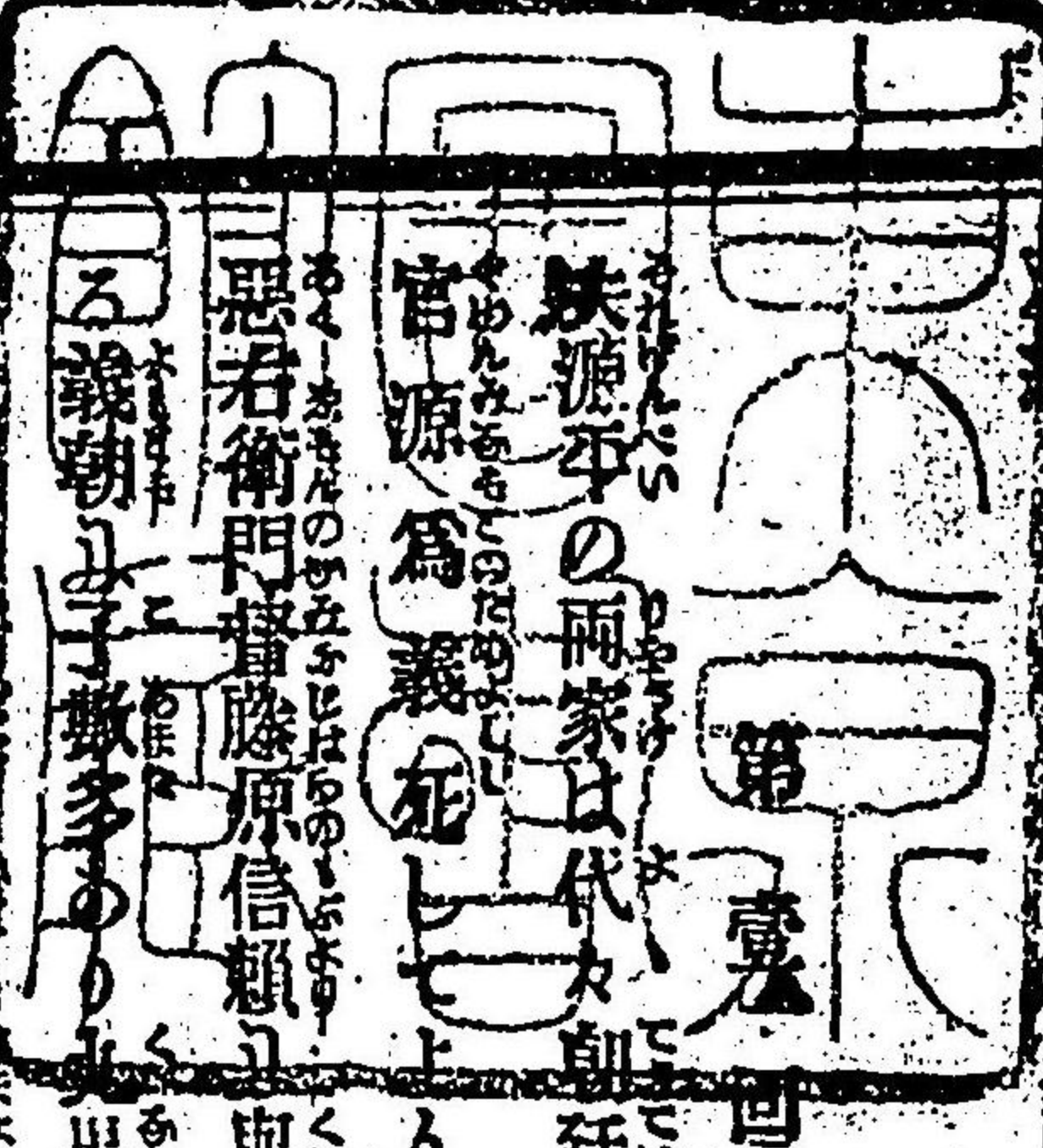
叙 我朝みて軍陳の堅固を言ば補正成を以て冠となし戦争の敏
 捷さを言ば源義經より勝たるは勿るべし正成が天王寺の出
 没千早の籠城義經が鶺鴒の逆落し四國の風波渡りみて知る
 べし茲に隅田園氏鶴聲社主人の需み應じて義經一代記を
 のし牛若丸の始めより高館に終る迄を記したり然れども事
 の多端ある那短楮み尽すを得んや因て園氏も又義經の敏捷
 み習ひ鞍馬山より筆を逆落しにして人の知れる件尤僅み筋
 を見せ奥州落み至り又詳みしたるは宜編集の作略を得たる
 者みして其功專首尾み在ば辨慶が安宅み讀る勅進帳と一ツ
 み聞給はんと勿らんを乞

梅亭金鵝誌

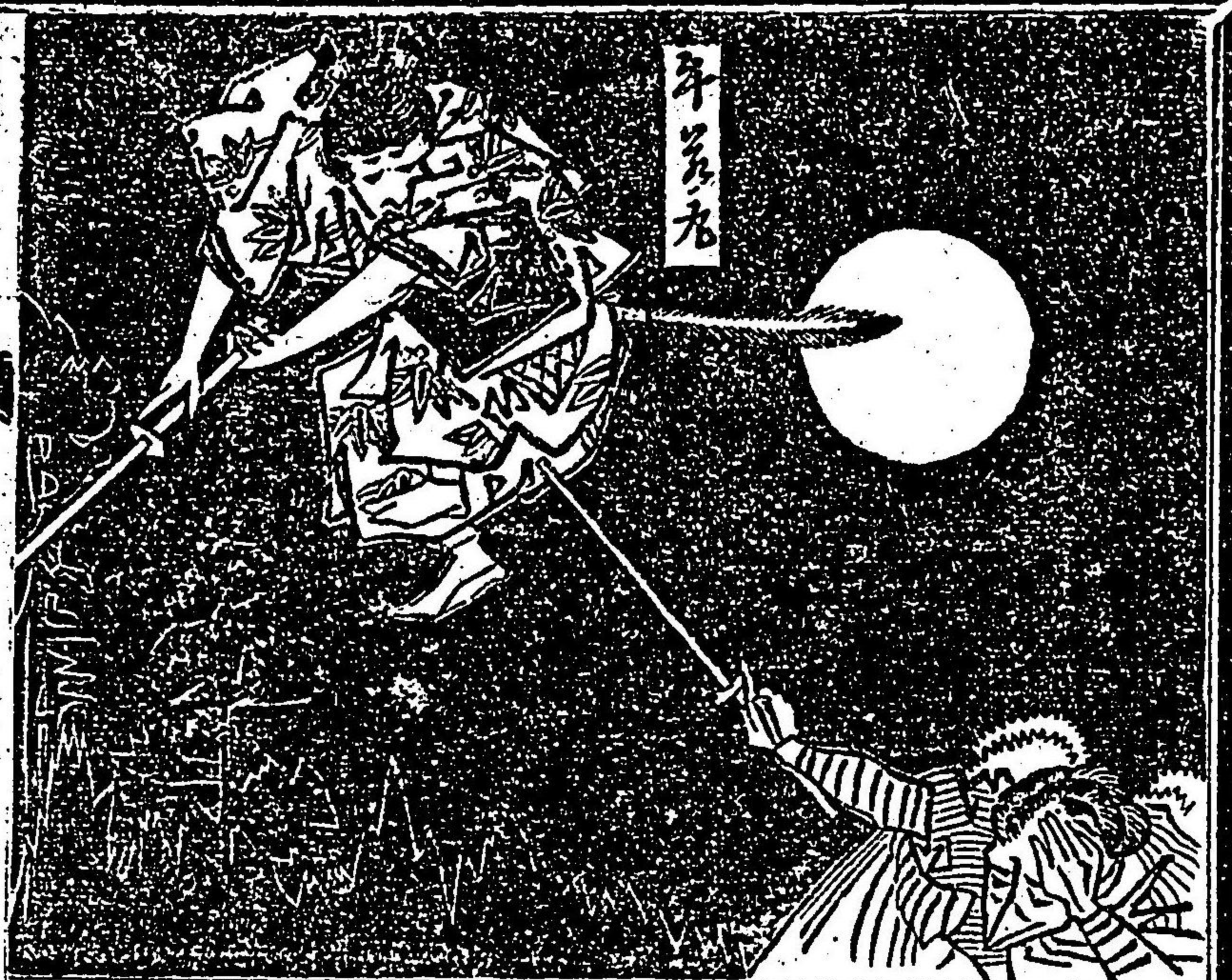
長聖一代記



東京 岡田國古雄編輯



源義朝の兩家は代々朝廷を守護し奉つるの任たり然るに保元元年崇徳院御謀叛の時六條判
 官源為義死し源家武威衰へ平家時を得て盛なりしを左馬頭源義朝深く憤り
 悪君衛門督藤原信賴と與し平治の合戦に打負尾張國野間の内海にて長田庄司忠致が爲に討
 る義朝父子數多あり男牛若丸時二才母常盤に懷れ兄今若は七才(後)頼朝是也(乙)若は
 五才俱み小幡の里に漂漂しと搜出されて誅せらる可かりしを清盛常盤が容色の美きと愛
 納て妾とす故に常盤が子三人の命を助く去れ共今若は豆州蛭小島へ謫せらる常盤清盛に
 廢られて後一條大藏卿長成に嫁す牛若又母に従つて大藏卿に養はれ七才の時鞍馬山東光坊
 の室に入て遮那王丸と號けり然れども出家を嫌ひ父の警平家を領けん事を欲ひ晝は終日學
 問を事とし又武藝志し僧正が谷みて天狗と夜なく兵法の稽古を爲しければ身体の輕



年々丸

き操りの自在人間業とは覺ざりき十四才の秋
 の頃より惡僧共を集め木太刀にて打合給ふ
 四五人を只一人して相手とふし勝を得玉ふ程
 ありき常に毘沙門堂へ参り夫より夜毎に貴船
 へ詣づるとて出玉ふを或夜禪林房と和泉の律
 師と示し合せ潜に跡を付て行たるに遮那王は
 先本堂へ参り其より貴船へ趣く途みて折節空
 掻最暗きと十人斗の聲して山に上かと思へ
 ば谿乃底に有又管絃之音聞ゆ禪林房も和泉も
 魂を冷し叢を漸々匍匐て寺に歸り衆僧も語
 りしに皆々舌を巻て打驚さけり遮那王は斯と
 も知らず僧正が谷みて大天狗に兵法を皆ひ給

去程に其年暮明れば承安三年の秋、頃洛東五條河原にて毎夜何者共知を通行の人々と
 聞殺致すと乃風聞おこり今は洛外に至る迄、これ噂高ければ遮那王丸も此事を聞何成者乃爲
 業からん我是を試みんと或夜鞍馬を密に出て洛東五條河原に通り掛るを一人は入道大長刀
 を携へ願れ出て妄進、遮那王を只一討に爲さんと切て懸るを心得たりて抜合せ秘術を尽し
 て切結へとも雌雄更に分たき此方は左右へ身を飛し或は欄干に在り又葱臺を小楯とふし
 飛鳥乃如き景状人乃業とも見えざれば流石に大入道も驚さしが暫し待れよ御曹子吾は山
 門代僧武藏坊辨慶と申者也能主を求んと年比之を心掛我に勝りし人有ば其を主君の仰が
 物と今日迄夜句當所みて試みしが今宵不斗君を得たり願くは長く君臣の誓ひを爲し玉へと
 膝折て従ひければ遮那王も打悦び我こうえ清和天皇に後胤八幡太郎義家が曾孫左馬頭義朝
 が九男幼名半若丸と云今遮那王丸の申也汝我に真心を以て従ふ事神妙也某大望有身ふれ
 ば一先曾祖父八幡殿に由縁有を以て奥州に秀衡を頼み身を寄后事を爲さんと思へり汝も來
 れの辨慶を將てそは後金商橋次季春と伴入れ都を走り路久にて元服し九郎義經と稱り秀衡

の館に居給ひしが十八歳の春再び都に登り吉
 岡鬼一法眼を師とし孫子長良が秘せし術を學
 び、劍道兵術の奥義を極め猶も義經法眼が娘に
 密通して彼秘書を娘に偷み出させ寫し取再び
 奥州に下り給ひしが兄兵衛佐頼朝石橋山に旗
 を掲給ふ由を聞て秀衡も我に三百騎の勢を
 貸給へ馳上て兄頼朝を助け平家を討て父の讐
 を報はんと望まれけ共秀衡熱思愖じて申様
 當時平家は四海を掌り握り武威を天下に掩
 へり清盛世にあらん程は平家を亡さん事難く
 社登えらるれ暫く時運の至るを待て事を起し
 玉へと詞を尽し制しけれ共義經は一途に父の



警を親じ會稽代取を雪がん早晩乃時を待べさど假合骸を戰場に曝ども兄は浮沈を餘所に見て止べきか去ながら秀衡み知らせせしめて彼地に馳至らん恩を顧みざるみ似たりとて密に信夫郡杉目の城に赴きその意中を語りける

第二回

斯て義経は杉目太即行信志しを告又大鳥の城主佐藤庄司基治語り此度乃出陣を秀衡が免じ呉る様も依頼たるも兩人も只管秀衡は異見を任給へて止めしか共止るべき形勢あらねば此上は力及ばず行信も御供も参るべしや申せば佐藤庄司は年老たりとて其子三郎兵衛副信四郎兵衛忠信を御供も参らせ義経を諫て云君は武勇鋭きを以て人々誇給ふ癖あり我は兄弟の中も末子ありや云事忘れ給はせ佐殿の下知み從ひ寛優みして強ちみ先驅を望み給ふべからざる然ばやて人々後を取給ふと操返し申ければ義経庄司が志しを深く謝し杉目行信佐藤副信同志信伴七郎治知金剛次郎秀方等の軍兵二百七十騎義経の近習には伊勢三郎義盛武藏坊辨慶常陸房海尊堀彌太郎景光片岡八郎弘常熊井太郎忠基等を初

め打從へ大鳥の城を首途有て治承四年の十月九日御前子義経は兄頼朝が跡を追て馳上り駿河國黄瀬川にて佐殿に對面有壽永三年蒲冠者範頼と兩人佐殿の代官として入洛有木曾義仲を討又平家を三草山に敗り一の谷に發向し鵜越より責下て討事急なれば平家讀岐國に走り屋島に内裡す義経一先歸浴あし左衛門少尉に任じ從五位下叙し檢非違使判官に進み院内の昇殿を聽され平家追討の使官を賜ひ文治元年攝州渡邊より風波を凌ぎ讀岐の屋島に渡りて戦ふ千時佐藤副信は義経の身替も立能登守教経の矢も當て死す平家は此地も堪らぬ長門國赤間關の海上に漂ふ義経赤間關檀浦に至りて攻平家軍敗れ運尽て安徳天皇に二位の尼懷さ奉つりて海に沈む其外門脇中納言教盛新中納言知盛平宰相經盛新三位中將資盛小松少將有盛左馬頭行盛等とな入水す建禮門院を始め前内大臣宗盛平大納言時忠右衛門督清宗及び信基時實等を生擲平家の一族を悉く討亡し神寶を守護し生擲の人々を率て都に歸る此度の軍功皆義経が武勇謀略を以ての故なれば人々誇の意發諸士を慢り給ふに至れり頼朝と義経が謀略の神速成事鬼神の如きを怖れ惡み給ふ乃心ある所へ梶原平三景時



逆權代争ひより義経を恨み鎌倉殿に謀しける
 上義経建禮門院に御舟に参り又平大納言時忠
 卿に女を通じ鎌倉に伺をせして五位乃尉に任
 せし事を頼朝卿深々憤はり給ふが故に義経平
 家は囚人平宗盛及び清宗を具て鎌倉に到給
 へ共鎌倉に入られず故に空しく宗盛父子を具
 て都に歸り上られ路次みて宗盛父子を誅す
 べき勅命をうけ近江國篠原にて之を截せり同
 年八月伊豫守に任じ京都を守護せり鎌倉殿に
 義経を怖しき者と思し深く惡く所領を悉く
 没収せし上土佐房昌俊を討手し登し堀川乃館
 に夜討すと雖も義経却て土佐房を討給ふ夫よ

り義経は頼朝追討乃院宣を強て乞請且四國九
 州に地頭職たる官符を得て四國に渡らんと長
 從には佐藤忠信龜井六郎片岡八郎熊井太郎伊
 勢三郎常陸房海壽武藏坊辨慶以下二百餘騎に
 て舟出せしに大物の浦みて難風に遇船悉く
 破損し散々吹流され九郎判官の舟幸じて
 住吉に濱みぞ着しる

第三回

却説後白河法皇義経の乞に任せ頼朝追討に
 院宣を賜ひしと鎌倉へ聞しは頼朝憤はり又
 義経追討の院宣を乞畿内近國に告知らせしに
 依て義経西國へ渡海叶え一先奥州に下向し



秀衡を頼んと思せ共四方皆敵と成て道を塞げれば暫く天王寺に匿れ士卒等先時様を見
 て奥州に下りし時再び参るべしとて別れ武藏坊辨慶備前半四郎片岡八郎佐藤四郎白拍
 子都など僅け士卒を引連大和路に差掛り吉水院に隠れ給へとも河倉法眼山科法眼送王
 禪師の横川覺範のなんど名を得し悪僧原一山を捜し求むるより爰にて靜に別れ中院谷に隠
 れたるに悪僧等猶も捜しければ多武峯十字坊に入又吉野乃奥に忍び居りしを悪僧等勢を増
 雪を踏で攻來る佐藤忠信は判官殿を快よく落さん爲自ら義經と名乗て確立る衆徒等一人の
 忠信も切蕪られ打る者數十人度を失ひたる其間に忠信此地を退れて都に上り日比親馴た
 る女乃家忍ぶを北條義時聞付て討手に向ふも忠信敵餘多討取竟に自殺せり茲も鎌倉殿は
 判官の行衛知ざるを深く恐れ彼も奥に下り秀衡何處なし數万に勢ひて賣來らば賊に由々
 敷大事なり早く奥州の通路を塞べしとて國々に新關を構へ隈なく探り求めたり去る程に義
 經は身を容る乃地非されば奥州に下らんと宇治山を越關の津に長時春が家ひて各々山伏に
 姿に變し北陸道をさして出立給ふ此時迄も北の方久我大納言時忠公の女付従ひ俱に身を



山伏
 稍し遙き旅も不赴き給ひぬ斯て判官は主従十
 二人朽木越より荒乳山に差懸れり此地には井
 上左衛門敦實兵衛新關を構へ判官を見咎めた
 れども井上忠長を以て体を痛はしくや思ひけん
 實乃山伏に社候へ無禮して明王乃御罰を蒙る
 べからせとて通しければ越前より舟に乗んと
 したれ共添々浦々關を居數百騎の軍勢嚴重
 に堅めたるに因り夫も叶はざ加賀國に懸り安
 宅の關を通りんとせし關守富樫勘家直此人
 を見てすれ判官殿よと騒ぎけるを辨慶少し
 め心れを關乃内入と入大音も呼はつて云ふ
 某等は南都東大寺大佛殿建立勸進に後乗坊

の命を受北陸道を廻る山伏也各勤進乃旋主に付給へど事もなげに云ければ開屋れ武士此
 体を見て如何に陳じ給ふとも見知る者候て跡み後たる強力社判官殿に紛れなし左云山伏は
 武藏坊辨慶成ん容易は通すまじと白刃を握つて道を塞げば義経は既み事顯れありと密に太
 刀み手を掛堅唾を吞で扣へたり辨慶呵々と打笑ひ通さずは通さぬ迄れと路次に疲たる瘦山
 伏さまで騒ぎ給ふは心得ぬ此方へ來れ人々と笈を下し開屋乃椽みとつかと座し判官殿と見
 過つて我々が首を刎られんも今日迄乃命ふり左ながら明王れ御罰を蒙り狂死し給はん社痛
 はしけれと暗囁夫と云ば一人も生ては置まじと目撃たる勢ひみ開乃人々恐れをなして見
 ければ富樫介詞を和げ斯宣ふ上は正れ山伏にて在すらん去ふがら彼なる強力は判官殿に似
 たる由告者候也此關は判官殿奥に下り給はん風聞有と似たる人にても誅せよと鎌倉殿れ嚴
 命を蒙りたれば似たる山伏を不運ふるあれ強力一人を止め各々は通らるへしと云ければ辨
 慶答て身輕と強力成ども一同に南都を發足し此所にて一人を捨置ん事行者乃身として有べ
 からざる行ひふり渠をも通し給はん程に誠け判官來られる迄幾日にもめれ逗留し一人も通



るまじとて動かされば人々持 羸不審は思へ
 共流石鎌倉殿の御連枝なり明日にも中直り
 給ひあはば威を万人の上と震ひ給はんを情なく
 捕へ参らすべき様有べからずと富樫介辨慶に
 對ひ一人の強力は爲に大勢の山伏達を止めや
 さんも便なふひへば一同み通しやべし我々が
 後日乃爲み候得ば笈の佛一軀を残し給るべ
 し望みければ然ばて念持佛を笈より取出
 し法華經一卷を添へて關守み渡し安宅の關を
 過たすけり

第四回

判官主従は辛じて虎口を脱れ如意の渡り着

舟みて渡らんとし給へ共渡守平權頭道を塞ぎ是こそ判官殿なれ討よ捕よや時アければ片岡八郎前も進み我々は羽黒山の山伏ぞ見誤て恥辱を蒙ア給ふふと云けまば恰判氣なる男進み出如何争ひ給ふやも後立たる強力は判官殿も紛なしやいふ辨慶態と怒れる色を顯し走ア寄て強力を徹と白眼此者は白山よア連たるなア故に所々みて怪められ我々も難儀を掛る奇怪さよと突たる杖を振あげて義經を散々打擲ければ渡守此体を見て判官殿も非ざりしと思ひ舟を出す期て判官も所々の難を脱れ出雲崎よア舟に乗り乙寺の満善阿闍梨が許み着ければ阿闍梨案内て津川柳津を過ア龜割山を越る時御臺俄に産け氣付て一子と分婉ありたア夫より信夫郡杉目が館に入給ふ然れども去る治承四年秀衡が異見をも用ひす立退たるなれば入道が心庭覺束なく思ひけるに秀衡聊かも恨奉つらま泉三郎忠衡を以迎として杉目に遣し前民部少輔藤原基成が住たる衣川の館を轉じて判官殿に奉ア最懇にぞ款待ける

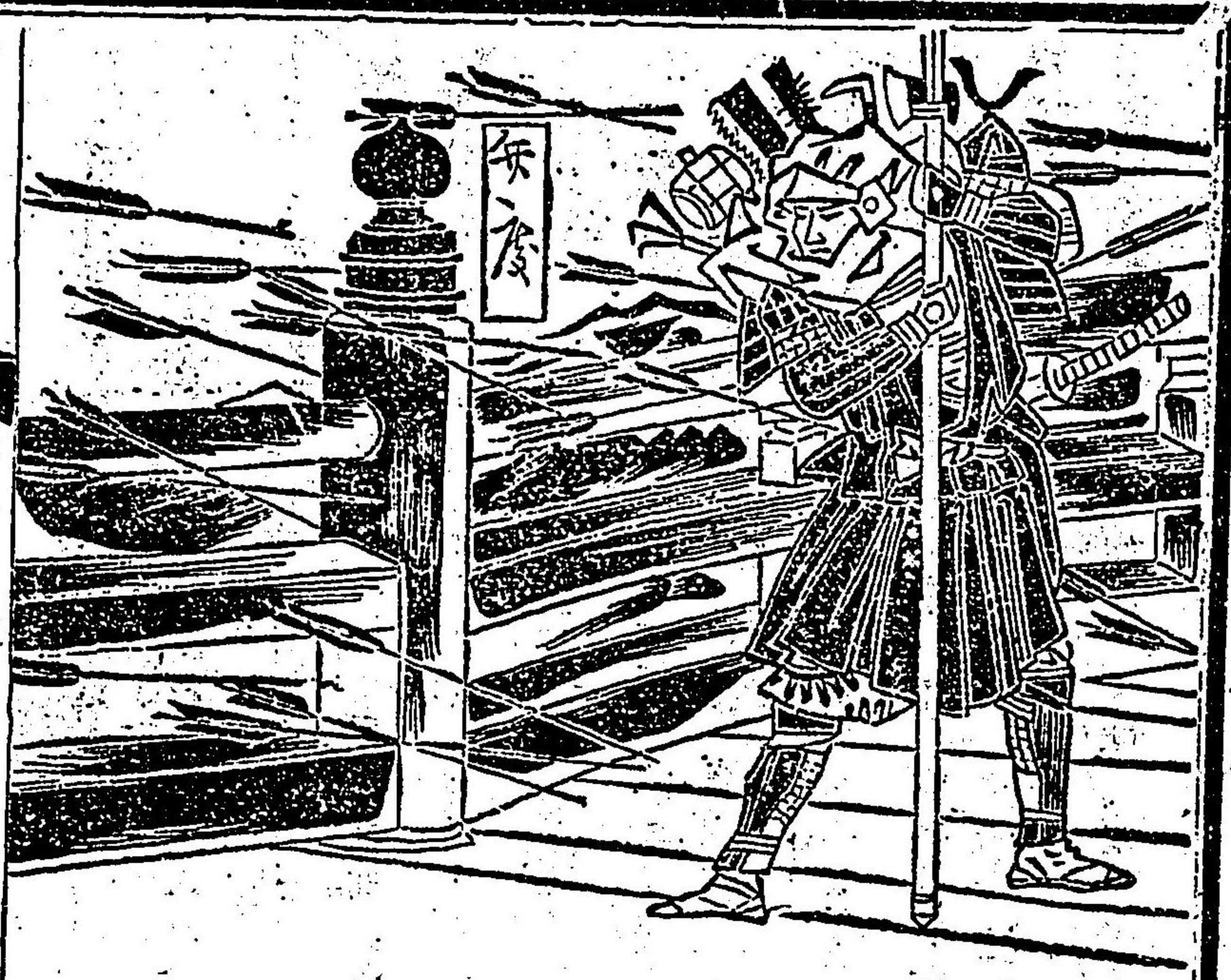
編者曰世に安宅の關みて辨慶勳進帳を讀義經を擲て難を退れしと云は如意が渡アの難

を混じて謠曲に作りしを誤り傳ふる者なるべし

斯て判官は衣川の館に入りより益々平泉家繁昌なし武威を震ひたりしが天文四年十月終に秀衡老病も罹ア卒去あせし依て其子泰衡鎮守府將軍に任せられ奥羽の遺領を續ぎ居たる鎌倉殿は義經の世に有らん限り一日も安き心非ざれば種々に思ひを痛し義經追討乃院宣を請受奥も使者を立て泰衡も判官を討て首を鎌倉へ送るべき様ア送られし泰衡閣將なれば父秀衡の遺言に背れ鎌倉殿の謀事とも悟り得ず連枝一門を集軍議を爲し文治五年閏四月廿七日追手の大將御館泰衡七千餘騎百合太郎三千餘騎若井川よア長部山の腰を廻て押寄る西城戸太郎國衡照井太郎遠衡本吉冠者高衡長崎四郎佐光等を初め其勢一万餘騎落居大門瀨臺所々山々に陣を張り廿九日の曉に平泉に勢金鼓を鳴し陣を作て攻寄る衣川の館には其勢僅二百人平泉の大軍を些其恐れ心静し最期に酒宴を催し敵兵を近々と引寄一時山城戸を開き武藏坊を始め勇兵三四十人切て出散々も切倒し或も射殺し難抛ひ群る羊も猛虎乃荒るが如く血戦なし數百の人を討と雖を敵も雲霞の如くなれば義經の兵今も殘



り少くありみけり茲に伊豫守義経は泰衡變心
 わざしより一途み生害と思ひ定め持佛堂み籠
 て法華經を心靜み讀誦の所へ辨慶鎧を未み
 染て馳來り軍は早今を限りと見えてみ鈴木兄
 弟鷲尾片岡伊勢三郎等も思ひの儘み働きて討
 死仕りぬ兵卒等も残り少なく成たれば辨慶
 も斯迄手負たれど今一度最期は見參と存て
 備前駿河熊井等み敵を防せ参りたりみ心靜
 み御生害いべし辨慶も頓て御供仕らんとやけ
 れば判官殿經をぞ置都みて相見しより死
 を共みと誓ひたれば我を討て出汝と申し所み
 死せんと思へ共不足ある敵み遇んぞ口惜し然

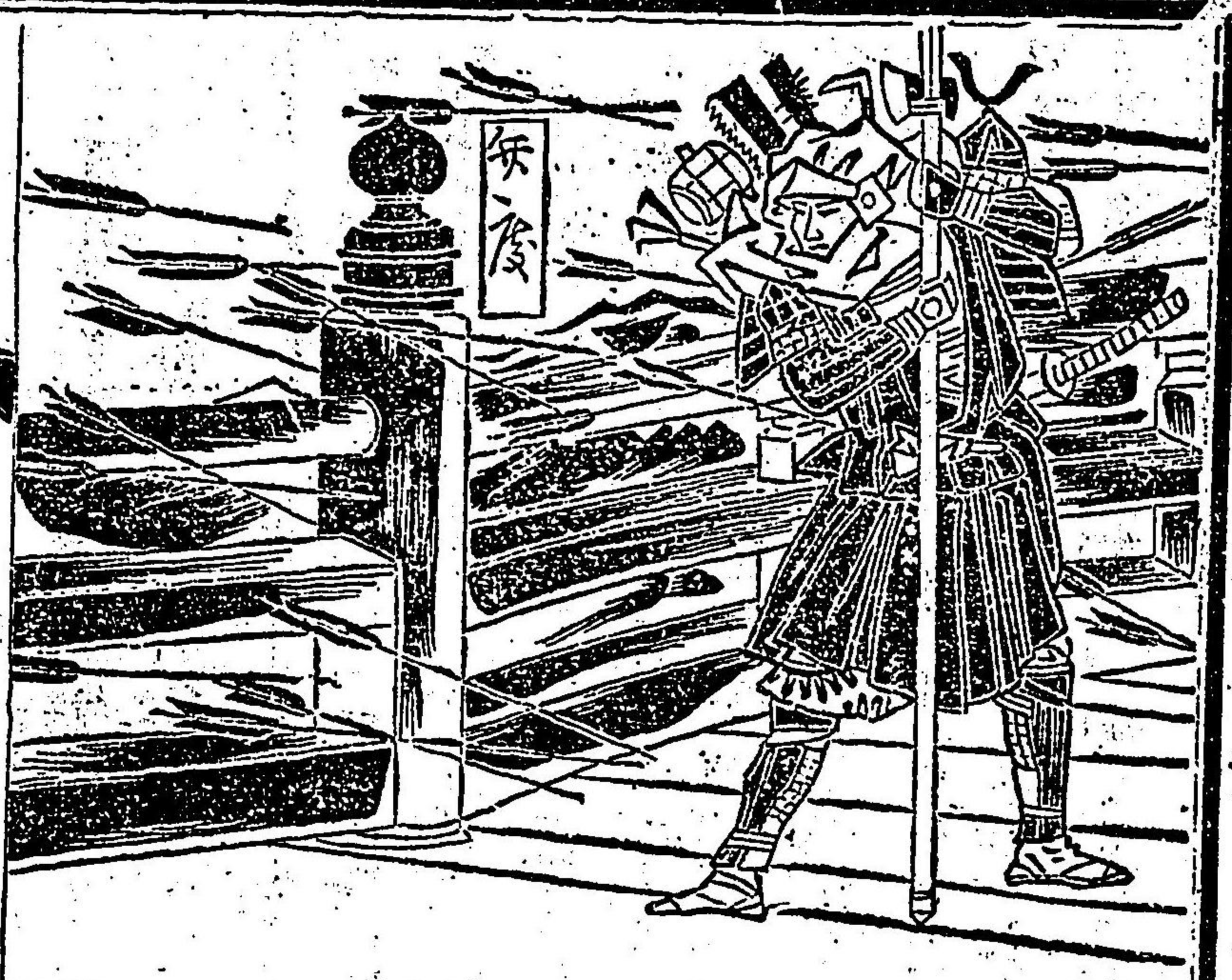


ば心靜み生害すべしと仰ければ辨慶も尽ぬ
 餘波み暫く猶豫けるが敵は物音耳近く聞ゆる
 みぞ生害あらん程は何で敵を寄着へさど雄
 刀抱籠で又城門へと駈出たり此時増尾十郎權
 頭兼房喜三太清悦は前刻より櫓の上み有て敵
 を防けるが今は矢種尽ければ是迄ぞと櫓を下
 らんとする所に何者が射たりけん箭一筋來て
 喜三太が頸の骨を射たりしかば堪得ぬ眞頭
 み落て死たり權頭兼房是を見て垂木に把縁飛
 下て主君判官殿は如何なされけんぞ持佛堂へ
 ぞ馳付ける

第五回



り少くありまけり茲に伊豫守義經は泰衡變心
 わりしより一途み生害と思ひ定め持佛堂に籠
 て法華經を心靜し讀誦の所へ辨慶鎧を未み
 染て馳來り軍は早今を限りと見えては鈴木兄
 弟鷲尾片岡伊勢三郎等も思ひの儘に働きて討
 死仕りぬ兵卒等も残り少なくなれば辨慶
 も斯迄手を負たれど今一度最期は見參と存て
 備前駿河熊井等も敵を防せ参りたり心靜
 み御生害いへし辨慶も頓て御供仕らんとすけ
 れば判官殿經をも置都みて相見しより死
 を共に誓ひたれば我を討て出汝と同じ所
 死せんと思へ共不足ある敵に遇んを口惜し然



ば心靜み生害すべしと仰ければ辨慶も尽ぬ
 餘波も暫く猶豫けるが敵は物音耳近く聞ゆる
 みどは生害あらん程は何で敵を寄着へさど雄
 刀抱籠で又城門へと駈出たり此時増尾十郎權
 頭兼房喜三太清悦は前刻より櫓の上み有て敵
 を防けるが今は矢種尽ければ是迄ぞと櫓を下
 らんとする所に何者が射たりけん第一筋來て
 喜三太が頸の骨を射たりしかば堪得ず眞顛
 且落て死たり權頭兼房是を見て垂木に把縁飛
 下て主君判官殿は如何なされけん持佛堂へ
 ぞ馳付ける

第五回

此時判官北の方み對ひ義經は冤屈と云ふがら朝敵れ名を蒙る上は此地を遡るとも何國み身を匿さんや生害と思ひ定たりゆ身は故入道が後室の許基成が館に送り参すへし悪くは計ひ候まじと有ければ北の方涙に哽び今更都へ還らん事思ひも寄を唯未來迄も同じ道み伴はせ給へ疾々自らを害し給へと西み向て合掌し更に動のねば今は是非なし兼房よさに計ふへしと仰けれ共兼房涙み昏何には説ふればとて何處に刃を當進すへきとて敢て進み得ざれば北の方聲を激し父君の汝を我み傳給ふは斯る期乃爲らきや平常は斯る不覺の者とを見ざりしに能も怯しけるよな死後れ雜人れ手み渡り辱めを受んより自ら死ん其刀を與へよと宣へば兼房理み逼り消る心を取直し腰刀を抜北の方の肩を押へ左れ脇より右の乳下まで刺串せば念佛の聲をともみ果給ふ時み年二十二常陸房は四才にあつたる姫君乳媪に抱れ居たる前み蚤と参り母君も早死出れ山といふ面白き所へ参られたり父君も聽ては出也君をも誘ひ奉つるへしと抱取れば常陸房み接着給ひ疾率行よと仰ければ畏つて候と持佛堂み馳歸りア槍しくも鳩尾を二刀刺串て害し又産て七日に成らぬ姫君をも同く害し北の方れ衣の

下み隠しければ判官も今は心易し兼房介錯仕れとて三條れ小鍛冶が打たる刀鞍馬山に奉納有しを西國下向れ特別當本尊の多門天より申下して義經に奉つりしを秘藏し給ひしが此刀みて腹切て伏給ふ時に年三十一兼房介錯せし後遺戸格子を持佛堂に積重ね四方より火を放れば折節風烈く猛火四面み熾盛れり乳媪侍女これを見ていざや死出三途の御供せんと互に手み手を取組つ猛火中へ飛入て同じ煙と成たりけり斯て武藏坊辨慶は再び城門へ馳出見れば備前平四郎熊井太郎駿河次郎依田源入兵衛赤井次郎等血戰ふして討死しけるを見て辨慶も最早是迄の運命なりと群がる敵を大長刀にて薙拂ひ竟み衣川乃正中み大石有しが其上み飛移り立たるまゝに死せしといふ是を方言み藁人形ならんと云たりしむひべありけり一説み義經兼て持佛堂の縁れ下より匿路を設置き北乃方若君及び武藏坊辨慶伊勢三郎等の勇士十二人船に乗じて蝦夷が嶋に渡れりと云は實ならんか俗説み今れ清朝は義經の裔なり故に清和乃清の字を以て國號とすやいへや又圖書大全と云る書み清王は日本源乃義經が裔とあるよし或書み見えたり

實説 雙紙義經 一代記 大尾

此時判官北の方み對ひ義經は冤屈と云ふがら朝敵に名を蒙る上は此地を逃るとも何國も身を匿さんや生害と思ひ定たり身は故入道が後室の許基成が館に送り参すへし悪くは計ひ候まじと有ければ北の方涙に哽び今更都へ還らん事思ひも寄を唯未來迄も同じ道は伴はせ給へ疾々自らを害し給へと西に向て合掌し更に動のねば今は是非なし兼房よきに計ふへしと仰けれ共兼房涙も昏何には詫ふればとて何處に刃を當進すへきとて敢て進み得ざれば北の方聲を激し父君の汝を我み傳給ふは斯る期乃爲らざるや平常は斯る不覺の者ぞを見ざりしに能も怯しけるよな死後れ雜人れ手み渡り辱めを受んより自ら死ん其刀を與へよと宣へば兼房理も通り消る心を取直し腰刀を抜北の方の肩を押へ左に脇より右の乳下まで刺串せば念佛の聲をともみ果給ふ時み年二十二常陸房は四才にあつたる姫君乳媪に抱れ居たる前み蚤と参り母君を早死出れ山といふ面白き所へ参られたり父君も聽ては出也君をも誘ひ奉つるへしと抱取れば常陸房も接着給ひ疾率行よと仰ければ畏つて候と持佛堂も馳歸りア愴しくも鳩尾を二刀刺串て害し又産て七日に成らぬ姫君をも同く害し北の方代衣の

下み隠しければ判官も今は心易し兼房介錯仕れとて三條に小鍛冶が打たる刀鞍馬山に奉納有しを西國下向代特別當本尊の多門天より申下して義經に奉つりしを秘藏し給ひしが此刀にて腹切て伏給ふ時に年三十一兼房介錯せし後遺戸格子を持佛堂に積重ね四方より火を放れば折筋風烈く猛火四面に熾盛れり乳媪侍女これを見ていざや死出三途の御供せんと互に手み手を取組つ猛火の中へ飛入て同じ煙と成たりけり斯て武藏坊辨慶は再び城門へ馳出見れば備前平四郎熊井太郎駿河次郎依田源八兵衛赤井次郎等血戰あして討死しけるを見て辨慶も最早是迄の運命なりと群がる敵を大長刀にて薙拂ひ竟み衣川乃正中み大石有しが其上み飛移り立たるまに死せしといふ是を方言み藪人形ならんと云たりしむむべありけり一説み義經兼て持佛堂の縁下より匿路を設置さ北乃方若君及び武藏坊辨慶伊勢三郎等の勇士十二人船に乗じて蝦夷が嶋に渡れりと云は實ならんか俗説み今れ清朝は義經の裔なり故に清和乃清の字を以て國號とすやいへり又圖書大全と云る書み清王は日本源乃義經が裔とあるよし或書み見えたり

實説 義經 一代記 大尾

明治十八年三月三十一日御届

同年五月刻成

(定價金四錢)

反刻八

京都府平民

内藤彦一

下京區十三組貞安前町
寺町四條下ル廿一番戸

各地弘通

西京新	上仙書店
京極四條北	川勝徳次郎
同 寺町綾小路下ル	改進堂
同 松原下ル	便利堂
同 東二入	駿々堂
同 御池下ル	太田權七
同 同	田中治兵衛
同 同	佐々木九如堂
同 富小路三條北	澤一二郎
江州大津	新々堂
同 彦根	

同 長濱御堂前	中村藤平
丹波龜岡	内藤半月堂
同 園部	大西好文堂
同 同	犬石藤七
同 福知山	高木重兵衛
同 丹後峯山	上島長助
越前武生	安立正三郎
大坂本町四丁目	岡嶋支店
鹿兒嶋中町	吉田幸兵衛

倭漢西洋御書物賣買所

并に用事上り下り掛合しおありせし事不申候旨書付候

三府錦画繪本州紙類

新板お取仕入り中り方お望み候
御用向し御用候事

義方史海内
大津去
所年お取

白王都画州紙仕入所

寺町通四條下ル

内藤半月堂版

明治十八年三月三十一日御届 同年五月刻成

(定價金四錢)

反刻八

京都府平民

内藤彦一

下京區十三組貞安前町
寺町四條下九廿一番戸

各地弘通

西京新京極四條北	上仙書店	同 長濱御堂前	中村藤平
同 寺町綾小路下ル	川勝徳次郎	丹波龜岡	内藤半月堂
同 松原下ル	改進堂	同 國部	大西好文堂
同 東二入	便利堂	同	犬石藤七
同 御池下ル	駿々堂	同 福知山	高木重兵衛
同	太田權七	丹後峯山	上島長助
同	田中治兵衛	越前武生	安立正三郎
同 富小路三條北	佐々木九如堂	大坂本町四丁目	岡嶋支店
江州大津	澤一二郎	鹿兒嶋中町	吉田幸兵衛
同 彦根	新々堂		

倭漢西洋御書物賣買所

并に用い古本を辨るる事と云ふ事不慮に官製を以て

三府錦画繪本州紙類

新板おしり仕入り中々るり望み必す
御用向う御下換事致す

義方史海為撰
大津表紙
河津玉物

白王都禹州紙仕入所

寺町通四條下ル

内藤半月堂版

